

第3章 生活のなかのケアと信仰

1 ルイゼ・ハーベル

「階段をのけて！」 小児まひによる被害

資料

ルイゼ・ハーベル³²は、一歳と三ヶ月の時、小児まひ（ポリオ）をわずらい、それ以来、からだに障害を負い、車いすを利用してゐる。彼女は福音主義教会青年会の会員として国家社会主義の脅迫を受け、父親は政治的理由で家具職人の職を失っている。父親の失業により、母親は生計を得るためにやむをえず家庭菜園で野菜の栽培もした。このような状況にもかかわらず両親は娘に必要なあらゆる支援装具を買い与え、高等学校に通学させ、職業課程卒業試験の受験もできるようにした。その上さらに二人の孤児を家族に受け入れていた。このような精神的負担は母親を自殺にまで追いやってしまった。

家族の社会的状況を背景に、ルイゼ・ハーベルの心中に生涯を通して抱え込むことになる疑問が浮かぶ。

『「神の民が神を拒む時、神は何ができるのか？」と、わたしは・・・怒りと苦しみに満たされながら考えました。

この疑問はわたしの生涯を通じてわたしのこころの一隅を占める疑問となってきました。もし、いつも他人の助けに依存しているとしたら、その存在のすべてが依存しているとしたら、それは大変な重荷になります。助けようとしても助けることができない無力な神について、わたしはずっと考え続け

ました。」⁽⁶⁴⁾

「役に立たない地上の教会員」に対して何の手も打つことができないように見える無力な神に対し、彼女は、怒りと苦しみ、また攻撃⁽³⁾を向けた。神が彼女の中心テーマになった。つらい悲しみと嘆きを訴えると、いつも、信心深い人たちが彼女を被告席に座らせ、何でも知っている神の弁護人たちが神を畏れるように諭^{さと}している。

「わたしが異端的な考えを口にする、いつも、神は無力ではないということを証明する信心深い人があらわれました。わたしは何でも知っているこの神の弁護人を、恐れるようになりました。」⁽⁶⁵⁾

ルイゼ・ハーベルは、一人になって、「神の民」・キリスト者が彼女に話してくれたものはまったく別の神をこころに思い浮かべた。彼女のこころに浮かんだ神は、時と共に彼女を信服させるようになった。それは、全能の神について語っているもの「よりも、むしろ新約聖書に近いものであった。

「わたしにとって、神は、すべてを服従させている勝利の神ではありません。わたしはこの世で挫折し、なにもできずに十字架につけられ、孤独の叫びをあげた苦しむキリストが分かります。わたしは彼とつながっているように感じました。」⁽⁶⁶⁾

ルイゼ・ハーベルは、祈らず、聖書を読まず、礼拝にも行かなくなり、神や教会とのすべての関係を根底から取り壊す攻撃状態⁽³⁾に至る。

「もう神には何も期待しないし、何も願わないと決めました。期待を裏切られることや、神に対する失望、そしてまた神の民に対する失望に打ちひしがれることが怖いのです。このことで危険をおかしたくはありません。そして冷静に考えた上で、自分の力ではどうすることもできないこの厳しい人生を受けいれようと決心しました。失敗するか成功するかわかりません。失敗したとしても、それはわたし自身がその原因であり、わたしの能力や可能性の問題であって、知らない神にすべてをゆだねてしまうより、わたしには耐えられるように思いました。」⁽⁶⁵⁾

しかし、この理性の拒絶は彼女の心情的な探求を反映している。ルイゼ・ハーベルの鋭い批判は攻撃状態⁽³⁾のしるしであり、それは受容状態⁽⁶⁾における批判的、共感的な対応をせまる。ルイゼ・ハーベルの格闘の様子は「階段をのけて！」という、叫ぶような題の本に描き出されている。この中から、母の自殺、地区のヘルパーへの志願、ある牧師との文通という三つの出来事を取り上げよう。

母親の自殺は、彼女が多くの重荷に耐えられなくなって、危機に対処できなくなったことを示している。娘、ルイゼ・ハーベルが攻撃状態において、その怒りと憤りを外に向け、また神に向けた攻撃とは対照的に、母親は生涯を通して、そのことを口にしなかった⁽⁷⁾ばかりか、沈黙のうちにしてすべてを耐えていたようである。彼女は毎日を生きるために闘い、さらに障害を負う娘のためにすべてを節約して貯金してきた。けれども、通貨改革により、そのあらゆる努力も一夜にして水泡に帰した⁽⁸⁾。

すべては意味を失い、彼女は無気力のうつ状態⁽⁵⁾におちいった。彼女と家族は、以前に

もまして、まったく「頼る者もないままに」、新たな状況に直面することとなった。(2)

わたしたちは第2章で、危機対処の学習プロセスにおける攻撃状態³がカタルシスとしての重要な役割を持っているという命題を説明した。母親の攻撃状態³の欠落は、そのために殆ど必然的に危機の中での拒絶状態を引き起こし、それによるうつ状態⁵における学習プロセスの停滞をもたらすことになる。

このことが母の場合にまさにそのとおりにあてはまり、また彼女の周囲の人たちにとのよ
うに大きな影響をもたらしたかは明らかである。一生無口だった母は、彼女に新しくふりか
かってきた不幸（通貨改革・意味喪失）の時に、攻撃的に反応することはなく、むしろ、
にぎりしめたこぶしの攻撃³を自分自身に向けざるをえなくなったのである。彼女は一回
目の自殺をはかるが、この失敗の結果、彼女の娘についての心配がはてしなく大きくなり、
そのころを埋め尽くした娘への思いは、「娘を道連れにして死のう」と思うようになる。ル
イゼ・ハーベルは彼女がその意志の力をふり絞⁴って死の誘惑に抵抗した様子を描いている。
事実、母は記憶に残っていないと言つもの「ころにいだいていた計画を実行に移すので
ある。彼女は眠っている娘を斧^{おの}で殺そうとする。新たな自殺の失敗は、母の愛を憎しみに変
える。この時点ではじめて、病におかされた状態で、それまでうつ積⁴していた攻撃³が手
に負えないほどになって爆発した。しかしそれは遅すぎた。母は何時間も次のようになり返
している。

「お前さえいなければなんでもできたのに。」毎朝毎晩がそうでした。

『お前さえいなければ、お前さえいなければ。』……わたしはがまんできなくなって『やめて!』と訴え、願ひ、叫びました。』(57)

娘は母のことを理解し、次のように弁護している。

「母は自分がしたいことを何もできませんでした。彼女はほんとうに多くのことを断念してきました。それは人としての限界を超えたものでした。彼女はいつも孤独でした。それは多分わたしという障害を負う子がいたためだったのでしょう。彼女は孤独だったのです。」(57)

けれども、攻撃(3)が始まったのは、あまりにも遅くなってころを病むようになつたこの段階であつた。それに、だれも助けられず、専門家のケアを受けることもなく、受容状態(6)に至るために対処する見通しをまったく持てなくなつた。母は三回目の自殺をはかり、入水自殺で亡くなる。ルイゼ・ハーベルは改めて苦しい胸の内を語っている。

「死んでしまった母のことを思う人たちが、それぞれに一度でも生きている時に訪ねてくれるか、または自分の家に招いてくれていたならば……母にとつて、その人生は少しは耐えやすいと感じられたのではないかと思います。」(60・61)

彼女はまたしても神の弁護人に裏切られることになる。

「牧師は葬儀の前日にわたしたちの家を訪ねてくれませんでした。そして、彼は母に最後の祈りを授けるかどうかまだ分からないと人づてに伝えてきました。」(61)

母は病気であつて、その死は、本来の意味での自殺ではないという理由で、最後の祈りがなされた。ルイゼ・ハーベルは、牧師が葬儀の説教で読んだ聖句が母の堅信礼けんしんれいの時に選ばれたものと同じであつたのはなぜか、それは「偶然」だつたのかと疑問に思つた。

「恐れるな、わたしはあなたを贖あがなう。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ。」⁽⁶²⁾

そこで始めて、彼女はこの聖書に続く後の句に気がついた。

「水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。」⁽⁶²⁾

彼女は、突然神の言葉に打たれる。

「母が全く孤独のうちに死ななければならなかつたということ、わたしは悲嘆にくれていました。彼女のそばにたれもいてあげられなかつたことを。ところが、今『わたしはあなたをそばにいました。彼女は見捨てられていません。今も見捨てられてはいません。恐れることはありません。』という人がそこにいたのです。わたしは突然、死よりも強い現実に引き入れられました。」⁽⁶²⁾

このことと矛盾するようであるが、彼女は葬儀の説教を、次のように受けとめていた。

「お墓での牧師のことばはわたしのこころに届きませんでした。涙も出ませんでした。」⁽⁶²⁾

ルイゼ・ハーベルが、神を信じるのにかまじめで繊細であつたか、それに対して教会員との関係、また教会との関係が、彼女にとってどんなに妨げであつたかをわたしたちは知らされる。彼女はそのことをあるキリスト教グループの牧師の訪問の時にやっと「気づくこと

になる。彼は次のような言葉を語っている。

「あなたはどこか道からはずれているように思われます。教会であなたとはしばらく会っていませんね。」⁽⁶³⁾・⁽⁶⁴⁾

ルイゼ・ハーベルは、彼女のおかれた困難な状況を、まず口頭で、次に手紙で丁寧に伝えようとした。彼女は身体障害者の車いすを使っている自分が、仕事のことや父のためにはたさなければならぬ家庭のさまざまなことのために、限界を超えて忙殺されていることをのべ、あえて次のような提案をした。

「牧師が開いている聖書教室に、毎週、五人ほどの女性がきています。その人たちが聖書の勉強のかわりに、一人ずつでもわたしの家に来て掃除の手伝いをしてもらえるならば、わたしはまる一年、掃除から解放されるのですが、ぶしつけのことを承知の上で言ってみました。ところが、それに対しては、神さまがだれかを送ってくださるように祈っていますと書かれた牧師の手紙を受取っただけでした。」⁽⁶⁴⁾

再び、制度教会に対する攻撃⁽⁶³⁾が始まるのである。

「神はわたしにだれも送ってはくれませんでした。その牧師は、その後一度もわたしを訪ねて来ません。わたしはひどく憤慨しました。『神の民が神を拒む時、神は何ができるのか?』と、わたしは怒りと苦しみにみだされながら考えました。それはわたしの生涯を通じてわたしのこころの一隅を占める疑問となってきました。」⁽⁶⁴⁾

ルイゼ・ハーベルはこのような例を山ほど書き記している。特に典型的なものは、地区へルバーの職を志願した際のまわりの人たちの反応である。終戦後、彼女はキリスト者の両親の娘であり、長いあいだ、福音主義教会青年会の会員であったので、州の青年牧師事務所に応募した。その時に、彼女が書いているように、とても親切に「障害」が問題になることはないですよと微笑みながら書類を受け取ったその人は、聖書学校の第一回セミナーに参加してくださいねと言って、受け入れを確約してくれる。彼女は事務職から教会の仕事への転職の理由として、職場でのインテグレーションと社会生活上のインテグレーションのあいだにある不一致をあげて、次のように言っている。

「職場で問題がなかったとしても、社会生活にとけ込むにはまだ問題がありました。」⁽³⁴⁾
「職場では次第にスタッフに認められるようになりました・・・」

仕事仲間は、わたしを障害によってではなく、仕事の能力で評価するようになりました。わたしは彼らの仲間でした。働いているあいだだけのことです。それ以外の時は一人になりました。わたしはいろいろなことに興味をもっていたので、一人でいることに問題はありませんでした。」⁽⁴⁵⁾

また、「福音主義教会青年会の会員」という独立した章で、自分がいかにこの青年会に無条件に受け入れられるようになったのかについて書いている。

「わたしは今でも、この人たちにほんとうに受けいれられていたと思っています。雪が降り、氷の張りつめた冬の日のような、時として危険を伴うような時でも、どこにでも一緒に連れて行ってもらうということはごく当たり前のことでした。」⁽³⁶⁾

彼女は、列車の中で一緒になった福音主義教会青年会のあるスタッフから二、三ヶ月前から始まっている聖書学校のクラスに向かうところだということを聞いて、愕然とする。彼女は州の青年牧師事務所で問い合わせるが、それは教会に対する彼女の失望の経験に新たな項目を加えるものに過ぎなかった。彼女は次のような手紙を受取る。

「……やはり障害は問題となります。けれどもあなたがこの職につくことを、神が望むのであれば、神は戸を開いてくださるはずですよ。」⁽⁴⁷⁾

そして、彼女は再び攻撃を爆発させる。彼女にとっての信仰と教会は対立したままである。

「わたしはがまんできません。『神の民はすべての扉をヒシヤッと閉じます。そうしておいて、神はその扉がもう一度開かれるのを待っているのです。』」

わたしは醒めきっていてほんとうに扉が開かれると思うほどに信心深くありませんでした。仕事仲間たちとの経験から、教会の人たちもほとんどの人が、同じような反応しかなかったらうということを知っていました。だから、わたしの申請がまた取り消しになったことを驚きもしませんでした。教会の中で起こることと、一般の職場で起こることに違いがあるわけでもないでしょう。」⁽⁴⁷⁾

このような経験が、際限なく積み重ねられ、そのたびにことにルイゼ・ハーベルの心中に『神の民が神を拒む時、神は何ができるのか?』という疑問が浮かび上がる。頭の中では、無力な神と絶交しようと思つのであるが、彼女のこころは神から離れることはできなかった。

ある。

ある牧師との文通は、彼女の攻撃的な格闘⁽³⁾が信仰と教会のあいだの葛藤⁽⁴⁾の中で牧師のケアを受けて、批判的 共感的な対応をしながら、ついに受容状態⁽⁵⁾への道を見出していった具体例を示している。手紙を交わしたこの牧師は、彼女の問題に、ありきたりの既製の回答例をもって接することなく、また特別な提案を次から次へと持ちかけるわけでもなく、ただひたすら彼女のつらさを深刻に受けとめたという点で、これまでのどんな人たちとも違っていた。

「彼は既製の答えをもっておりませんでした。そして、わたしの疑問に対しても何も言わず、わたしが身をもって実感することができないような信仰をわたしにおしつけようともしませんでした。」⁽⁶⁶⁾

彼女は、真実と真実らしさの違いを、また、教えを客観的に説教することと説教者の人格を通して初めてわたしたちに届くこととなる主観的な福音の違いを、彼から感じとっている。

「言うてはならない言葉があるといつことを彼から教わりました。その言葉は客観的には正しいのですが、実際に口に出すと人に投げつけた石のようです。彼は信念のない人のように見えます。信念のない牧師ですって？ わたしは彼のこともっと知りたいと思いました。」⁽⁶⁶⁾

のちに、彼女は、このような経験をもとに「人の前では決して泣きことを言わない」人たちをほめあげる、偽りの慰め人を批判している。

「ある婦人が『神があなたに過分なものを背負わせるということは、それだけ、あなたが愛されているということですよ』と手紙を書いてくれたことがあります。わたしは腹立ちのあまり、その愛をほんの少し減らしていただいて、その分、健康にしていただければ、大変うれしいのですが、と返事を書きました。

いま言えることは、言ってはならない言葉があるということです。理屈では、まさに、その通りですが、実際には破壊的な影響を与える言葉があります。苦しみという達成目標を全うすることを期待する神を信じていけるでしょうか？この神は、わたしがある決められた役割をはたすかぎりにおいて受けられ、わたしが苦しむ限りにおいて、わたしを愛するということです。」⁽²⁰⁴⁾

この牧師が、彼女のことを深く理解し、深刻な危機の中でケアをしてくれたことを、彼女は次のように描き出している。

「彼が住んでいる町で休暇を過ごしたことがあります。その時に、整形外科の検査を受けなければならなかったのですが、その診断結果はひどいものでした。実は、わたしは前から本当のことを知っていました。しかし、改めてはっきり言われると、それはわたしのところに重くのしかかりました。医者との話の後で、わたしは牧師を訪ねました。わたしは落ち着いているように見えたかもしれません。だから他人の病歴についてもあるかのように診断結果を彼に説明しました。けれども、『もし牧師が神の御心を受けいれましょうなどと言ったならば、わたしは彼に飛びかかってやろう』と思っていました。」⁽⁶⁷⁾

ルイゼ・ハーベルは、その人が、彼女の攻撃状態⁽³⁾を耐えて、それを防^(つと)もせず、むしろ無条件になすがまにさせ、彼女を受け入れ、彼女と共に苦しんでいることを初めて知る。

「この牧師さんは、そこに座り、何も言いませんでした。わたしは沈黙に耐えられなくなって、その場を立ち去りました。」

彼女は牧師の沈黙に動揺し、彼に返事を求めた。それには次のように答えられている。

「あなたが感じている通りです。わたしはどうしたらいいか、またあなたに何と言ったらいいのかわかりませんでした。牧師であっても、時には答えをもっていないことがあります。」⁽⁸⁸⁾

説教の双方向性について語り、闇の存在を認めているイングリットとシュテファン・ガストの経験と同様に、ルイゼ・ハーベルも闇の中から救い出されるといふ体験をしている。

ある牧師が暗闇の中を、彼女のところに来て、じつと傍そばにいて、彼女と共に耐えている。彼女は一人で耐えなくてもよい。彼がわたしの傍にいて、共に苦しんでくれる。二人であれば、暗闇のなかでもあの怖ろしい孤独感にさいなまれることもない。わたしは暗闇を耐えることができる。それを受け入れよう。そのように彼女は感じている。

「答えを持たないキリスト者がいるなんて、わたしには初めてのことでした。そのうえ、彼はわたしのために自分が知っている聖書のどんな言葉も口にしませんでした。自身の良心を満足させるために説教をすることもできたのに、彼はそうしませんでした。わたしのためを考えて、わたしの負担が軽くなるようにし、そのいくらかを自分で負おうとしました。こうして、彼はわたしにとって信じられる人物になりました。」⁽⁸⁸⁾

牧師が実生活の悩みをよく知っていれば知っているだけ、その牧師は真剣に神の助けを求

めるものだといつこと、彼女は気づく。そして彼女は再び神に「こころを向けるようになつていく。

「この牧師はとても忍耐強くわたしを見守ってくれました。わたしが再び神を求めるようになったことを、彼に感謝しています。この人はわたしに疑いのを禁じないで、信仰を持つように忠告もしませんでした。彼は『あなたがそのように神と格闘しているあいだ、わたしはあなたのことを心配していません』と書いた手紙をよこしたこともあります。」⁽⁶⁹⁾

ルイゼ・ハーベルは、キリスト教信仰が彼女の攻撃状態⁽³⁾をどのように発動させ、また持続させてきたかを記している。彼女は神という相手をもつことで、この神に対して逆らったり、見捨てたり、拒絶することができた。そしてまさに、そつすること、彼女は神に対して、自分自身に対して真剣に向き合い、彼女の母親の場合のようなアパティーなあきらめのうちに、困難な学習の中断にいたることから免れたのである。キリスト教信仰によって、彼女は攻撃状態⁽³⁾を受容状態⁽⁶⁾の前提とすることができたのである。彼女はいかなる時といえども神を本当に捨て去ることはできなかった。まさにローレル・リーやイングリット・ウエーバー・ガストと同様に、闇を共にしてくれた牧師のケアを通して、彼女は受容状態⁽⁶⁾としての批判的 共感的な対応を肯定するようになる。

「イエスについての話ならば素直に聞きます。わたしたちと同じように苦しんでいるイエスについて、決して超人でなく、『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか』と叫ぶことのできた

人についてならば。彼はわたしを、わたしの義務と強制から、いつもがんばっていなければならぬという強制から解き放ってくれました。彼のそばでなら、わたしは泣いたり、問うたり、訴えてよいのです。」⁽²⁰⁵⁾

彼女はその後地震計のように過敏に^{かびん}反応する。紋切り型の言葉を並べ立て、それが無意味なだけではなく、ともすれば被害者にとっては神に対する拒絶や信頼の喪失をもたらし、孤独に追いやるものであるということを忘れているような牧師に対する嫌悪感を彼女はあらわにしている。

「どんなことにもうまく答えるが、その言葉が人を孤独と絶望に追い込んでいくこともあるということに気づかない人たち、特に牧師たちが嫌いです。また聖書の言葉が時宜^{じぎ}をはずして語られると、状況を乗りきっていく助けにはなりません。それどころか、なおさら惨^{あは}めになるばかりです。わたしは、彼らが語る安っぽい言葉から自分を守るようになりました。」⁽²⁰⁶⁾

そして、彼女は人生の課題を知ることになる。

「わたしは、この数年間、なにかあらゆる心配事のごみ捨場のようになっています。それは人が「重荷を下ろす」ための場所です。だれに対してもあるがままの姿を受け入れようと思っています。・・・わたしがしていることは基本的には気持を伝えると言うこと以外の何ものでもありませんし、それ以上のことをしようとも思いません。わたしに真剣に向き合い、話を聞いてくれて、わたしの上に立つのではなく、隣にいてくれる人。そういう人がいます。」⁽²⁰⁵⁾

「必要なことは、その時の気分次第で、そばで泣いたり、笑ったり、祈ったり、叫んだりすることができる人、キリスト者がいることです。わたしの役割をではなく、わたしを愛してくれる人です。その時、苦しみは耐えられるものになり、神をもっと知り、人生は豊かなものになるでしょう。それでもなお、整理のつかない部分が残っているかもしれません。けれどもそれは誠実さを生み出すものであり、そのために残されているでしょう。」⁽²⁰⁷⁾

2 イングリット・ウェーバー＝ガスト

「あなたがわたしの不安から逃げなかったので」 うつによる被害

資料

イングリットとシュテファン・ウェーバー＝ガスト³³夫妻は、うつ病の経過について報告している。彼らは、この報告を牧会心理学の養成を受けた神学者として、また神経科と心療科の専門病院で働く病院牧師として記している。彼らは毎日、患者や療養客にこころのケアをおこない、類似した様々な病状には詳しくあったにもかかわらず、突然のパートナーのこころの病には、対応に困惑し、学齢前の一人娘をしばらく、他の人に世話してもらわなければならなくなった。

うつ病の時期に記されたイングリット・ウェーバー＝ガストの日記は、きわめて生々しい迫力を持っており、読者は客観的な報告としてよりも、自分に宛てて書かれた手紙のように感じ、また、あなたがわたしの不安から逃げなかったので」という本の題がまさに自分に向けられているかのように受け取るのである。

この本を読むと、表面的にはただ治療過程を記録するために医師の所見を書き連ねた病歴書の頁をめくっているような印象がもたらされるが、実際に「わたしたちの（キリスト教）信仰は、いつの時にどのような役に立っているか？」（第3章参照）、また「わたしたちの（ ）の経験は、わたしたちの（ ）説教の中でどのように伝えればよいか？」（第6章参照）、括弧の書き入れは筆者による（ ）という二人の著者の中心問題に向き合うこととなるのである。フランツ・ヨーゼフ・トロストは、『ドイツ日曜新聞』³⁴の評論家として、次のように書いている。

「驚くべきことには、『いちばんつらい時』に、信仰は何の役にも立たなかったのである。」

さらに続けて、次のようにも書いている。

「彼女は、ここを病んでいる人を信仰の言葉で慰めようとする時には、注意しなければならないと言っている。この見解はいろいろと考えさせるものである。」

その表題が、すべてを語っている。

「独りであるということを読む。」

ロルフ・ツェルファスはそのことについて、格好のコメントを本のカバーに書いている。

「若い夫婦の苦しみの証言は、そのまま彼らの信仰の感動的な表現である……。」

この夫妻は、こころを病んだパートナーセラピストとして、また信仰をもったキリスト者として、そして説教をする神学者として、三重に危機に直面することとなり、病におそわれたことを、創造の裂け目、彼らの共同体を二つに断ち割ろうとする裂け目として体験する。イングリット・ウエーバー・ガストは第3章、うつの時の信仰の役割」を率直に次のような否定的な問いかけから書き起こしている。

「まず初めに言わなければならないのは、一番つらい時に、信仰は何の役にも立たなかったということです。わたしの理性と意志は、それでも信仰を認めようとはしましたが、それはわたしのこころには届きませんでした。信仰は慰めにならず、絶望し苦しみから発せられる疑問に何も答えません。途方にくれているわたしには何の助けにもならなかったのです。むしろそれは、まったく反対で、信仰がわたしを支えたのではなく、わたしの方が信仰を支えなければならなかったのです。」^(32・33)

この章は、神への非難(32)で終わっている。

「今でも、わたしの祈りは、大体おなじようなものです。それは祈りだけでなく信仰についてもおおよそ当てはまります。信仰はその輝きを失ってしまいました。何よりも誠実に、そして忍耐強く、と思つて努力をしています。けれども、いつもある種の精神的な壁を乗り越えなければなりません。神がわたしに約束したすべてにそむいて、わたしを見捨てたことを、わたしはそう簡単に許せません。」⁽³⁸⁾

「努力をしています。けれども」と言う表現から、彼女の闘いの様子をはっきりと見ることがができる。会話分析家は、『けれども』の中に隠されている攻撃的な『嫌です』を読み取

るだろつ。

彼女は次のように言っている。

「神が・・・わたしを見捨てたことを・・・許せません。」

わたしたちはこの攻撃の跡を第6章、うつつの体験からの説教「までたどっていくことができる。彼女は、自身の問題を取り上げて「神よ、変えることができるものを、変える勇気を与えてください」というテーマで、大晦日おおみそかの説教をおこない、ハシディズムの話を通してラビ・ズーシャのことを語っている。ラビ・ズーシャはその死の直前に次のように言っている。

『あなたはなぜモーセでなかったのですか。』天国では、わたしにこのように問いかける人はいないでしょう。むしろ、『あなたは、なぜズーシャでなかったのですか。』と尋ねるのではないでしょうか。』
(373)

彼女は、自分のうつつの経験を説教の中で語っている。

「神は、不器用な人の分量、不安になりがちな人の分量、悲観的な人の分量、病気がちの人の分量、というように、一人ひとりの分量を定めて、それを満たすように求めているのだと思います。わたしがあ
の時おかれていた状況に対して、なぜ、何もしなかったのかと言われるかも知れません。なぜ、あなた
はいつまでも悲しんでいたのかと聞かれることはないでしょう。むしろ、その悲しみからあなたは何を
したのかと尋ねられるでしょう。あるいは、あなたはその悲しみから、他人の人生をいかに困難で厳し
いものであるかということを感じ取れるようになり、それによって何事も、すこし忍耐強く、すこし繊
細に、控えめに判断するようになりましたかと尋ねられるでしょう。なぜそんなにしょっちゅう病気に

なるのですかと言われることはないでしょう。そうではなく、あなたは病気になるって、そこで何をしましたか、病気になるって自由になった時間をどのように役立てましたか、と尋ねられるでしょう。あなたは働くという義務から、生活の心配をするという義務から解放され、十分な自由時間を手に入れました。それをどう使いましたか、病気でさえなければ、ああもできた、こうもできた、と言うような何の役にも立たない、きまりきった繰言をもらしていただけですか、それとも、たとえわずかでも、他人に喜びを与えるために、その時間を使いましたか。そしてそれはいつでも簡単にできたことではありませんか。あなたは人に耳を傾ける時間をもっていたのですから。もう一度やり直してみたいのです。人は、だれでも完全になれると思います。」(74・75)

わたしたちのこのころを動かすのはこのテーマそのものよりも、むしろ説教者自身である。³⁵彼女は語っていることを十分に理解している。それは彼女自身がこのテーマにこのころを打たれているからである。このような自分自身の感動について彼女は第5章の「有益な言葉」で次のように語っている。

「非論理的に聞こえるかもしれませんが、こういうことです。神はわたしたちの届かないところにいますが、それでもわたしがいつも口にする詩篇の章句がありました。それはわたしの祈りだったかもしませんが。唯一の支えを守るために、これらの章句を大事にしていたのかも知りません。特に大事にしていたのは、『主よ、あなたはわたしたちの避け所です』という章句でした。(57)

「わたしはいつも特別な気持ちをもつて次のことを読んできました。『主よ、わたしが賢くなるように、わたしの生涯の日数を教えてください。』『賢くなる』とは、真の救いにいたるステップだと思いましたが。賢くなるとは、混乱した暗闇の中で、その力を消耗し尽くすことなく、自身の過去を抱えて生きることが学ぶこと、そして、たとえそれがどれほど苦しいものであったとしてもその偽りの美しい見か

けを捨て去り、真実を直視することです。賢くなるということは、わたしにとって希望を失わないで深い闇の中をしつかりと見るということなのです。それがどれくらいまでできているか考えてみようとは思いませんが、実際にこの方向に進んでいることをなんとなく予感しています。確かに、この方向で癒しを求めることは、わたしにとって正しい道であり、そしてこの方向をしつかり守ることさえできれば、もっと容易に前進できるものと考えています。」⁽⁵⁹⁾

彼女は嘆きの詩篇への親近感について説明している。

「特に、嘆きの詩篇はわたしの実感をはつきりつつし出しているように感じました。ですから、もっと礼拝で取り上げればよいのに、しばしば思いました。」⁽³⁶⁾

「」の体験からの説教」の章は、「日々、自分の十字架を背負いなさい。」ルカ九・一八・二五を説いてしめくられている。彼女は次のように言った。

「あきらめることも怒り狂うこともなく、むしろ現実を直視して、『そうだ、こつなつてしまったのだ。それを受け入れなければならぬ。そして、わたしにはなにができるのだらうか』というのではないでしようか。十字架を負うということは、現実を受けいれることであって、幻のようなものを見て、自身をさらに苦しめるのではなく、あらゆる想像力を働かせることです……』
『全てかそうでなければ無だ』と言ってはなりません。そうでなく、『ほんのわずかでも』努力することです……。本来のキリストに従う道というものは、それはこのようにして始まるのです。この道は、自身の悲しみに打ちひしがれることなく、人に暖かい言葉をかけ、励ましのほほえみを投げかけ、救いの手をさしのべることから始まるのです。このようなことは、いずれもわずかな日数で学べるものではありません。人生がこれからもっと長く続くとしても、最後まで解放されない課題でしょう。しかも、

祈りの日課のように、日々新たに向かわなければならぬ課題でもあります。そう、それは日々の祈りです。主よ、わたしが日々新たに負う十字架こそが、わたしの一番大事な祈りです。アーメン。(100・101)

そして続けて、自分の痛みを示すこと²について簡潔な考察がのべられている。

「苦しみを克服するために、そのつらさを口にしようとする、また口にしなければならぬ人のために、そのために機会をわたしたちの間に設けるということも可能なかもしれません。わたしたちは泣いていないように見えても、ひそかな涙を流しているからです。」(91)

まるで虹のように人に向けられて架けられた神の橋のように、イングリット・ウェーバー「ガストは、その危機対処の経験を受けとめている。最初の信仰体験から、あなたがわたしを見捨てたことをまだ許すことができませぬ」と言って、神を非難する。この局面³の攻撃状態をこえて、「主よ、わたしが日々新たに負う十字架こそが、わたしが一番大事な祈りです。」という信仰告白にまでいたる、神に通じる橋を架けたのである。まさに、このために、彼女は「自分の痛みを示した」のである。

彼女はうつ状態⁵の中での信仰の重要な役割をはつきりと表現することもなく、キリスト教信仰は攻撃状態³を支持することができるという、わたしたちの命題もほとんど証明していない。イングリット・ウェーバー「ガストは夫や周囲の人、また自分自身に対して、攻撃を向ける必要はなかった。彼女は、直接に神を攻撃することができたのである。彼女のキリスト教信仰の力がそれを可能にしている。約束を破って彼女を見捨てた神に対して、彼

女はその責任を問うているのである。うつの中にいて不安にとらわれた彼女は、何らの怖れもいдаかず、驚くほどの勇氣をもってそうしたのである。

「不思議なことに、わたしはどんな罪の不安にも襲われることはなかったので、少なくともこの点では救われました……」

神から離れていると感じる時、わたしはそのことで苦しみました。けれども、神から離れていることが罪なことであるとか、反抗的態度や自暴自棄になっってしまったことが罪だとは決して思いませんでした……

わたしは神によつて荷物をいっぱいにならされたるはのように感じていました。だとすれば、神は少なくともその重さに耐えかねて崩れ落ちてしまったことのもたらす結果について責任をとるべきだったのではないのでしょうか？」⁽³⁷⁾

彼女は、どんなことがあつても、それは彼女の意志ではなかったかもしれないが、信仰から離れることができなかったので、恐れを抱かずにすんだ。

「信仰がわたしを支えたわけではありません。そうではなく、わたしが信仰を支えなければならなかったのです。けれども、それはわたしの助けでもありません。他人が、病人のために、わたしのために祈ることは、それがごくまれなことであつても、本当に慰めと感じられる時には、わたしにとってかけがえのないものでした。」⁽³³⁾

「うつの一歩ひどい時を除けば、わたし自身はいつも説教を続けてきました。それが可能だったので……。そして、それに対してわたしが受ける反響から、わたしの話が聴衆のこころに届いていることをつかがうことができました。」⁽³⁵⁾

彼女は説教の中で、神を離れることができないという経験について語っている。

「それどころか、人はだれでも、その人生で一度は感動と信頼のすべてを失う瞬間があります。その時、わたしたちは神を捨て去ることはできない人間に変わるのではないかと思うことがあります。それはわたしたちが神のことを聞いたことがあり、それ以来神のことを忘れることができないからではないかと思えます。わたしたちは、神の戸口の敷居で、その沈黙をこらえながら、神がやってくるまでその場所を守りぬかなければなりません。」⁽⁸⁴⁾

イングリット・ウェーバー・ガストは自分の経験したことを、説教でこのように語った。キリスト教信仰が、いわゆる批判的 共感的な対応において攻撃状態^③をカタルシスとして受容^⑥し成長していく。そのことを読者は彼女の説教から知ることができる。また彼女の夫でありパートナーセラピストであるシュテファン・ウェーバー・ガストも同様の見解を明らかにしている。彼は、自殺の誘惑との闘いについて包み隠さずに語り、妻と同じようにキリスト教信仰はうつ状態^⑤の中で何の役に立つのか、ということを問っているのである。

「ある意味で、わたしは妻のうつに手を焼いていました……。その当時、いろいろな思いがこころをよぎりました。妻の自殺をとめることもできないのではないかという思いも浮かんできました……。わたし自身が感情に打ちのめされた時期を過ごしました。わたしたち二人は感情に流されるままに、このようなかたちで現実から逃げるのが「できれば楽だったろうに」できなかったこと、また逃げることがゆるされなかったことは、とても残念です……。」^{この}

時に、わたしにとって信仰はどんな意味をもっていたかを明らかにすることは「課題ではあるが」、それは簡単なことではありません。直接には信仰は何の助けにもなりませんでした。わたしの傍らでだれよ

りも愛する妻が苦しんでいる姿を見ながら、わたしの祈りは時とともに激しさを増し、神は自分のしていることの正しさを証明すべきではないかと訴え、非難するような色合いを帯びるようになりました。本当にこころから祈った翌朝、それが偶然だったのかどうか、わたしには分かりませんが、妻がとてもよくなったことも何度かありました。」⁽³⁰⁾

「訴える」からといって神はおどしたりせず、神と「格闘し」、「争う」ことをゆるしている。そのために信仰が「間接的」にもせよ、助けとなると彼は考えている。

「とは言え、信仰によってわたしはなんとなく助けられてきました。わたしの信仰は大昔のユダヤ・キリスト教の伝統と結びついています。神は唯一の神であって、わたしたちは神と闘ってよい、訴えてもよい。だからと言って、神は報復したり脅したりはしない。そういうこころの広い神、それがわたしたちの神です。神と争うということは、それは無気力に運命を受け入れることが、沈黙の諦めしか生み出さないような時に、なおもしっかりと生きる力を保つことと言えるかも知れません。」⁽³¹⁾

間接的に危機に関わったシュテファン・ウェーバー⁽³²⁾ガストのケースも、キリスト教信仰はわたしたちを攻撃状態⁽³³⁾の中へと解放し、受容状態⁽³⁴⁾に至らせる、という命題を証明している。彼の場合も批判的、共感的な対応が選ばれているのである。

夫妻は、苦しみが神々しく変容することを求めるのではなく、むしろ信仰に疑問を持ち、他の神学者たちと同じように苦しみは生の密度を高め、そして創造の裂け目がわたしを貫いたことによって、説教が「双方向」的なものに変わったということを感じている。ここから次のように提案される。

説教をする時、聴衆の中につつ状態の人が聞いていることを考えにいれ、病気がもたらす暗闇の底にまで届く言葉を語るべきであろう。(34)

牧師はだれでも一定の職務をおこなう援助者としての役割に加えて、苦難の人生を歩む者の友人としてその傍らにいて、その苦しみを共に体験すべきである。(34)

嘆きの詩篇が礼拝の中でもっと取り上げられ、もっと広く知られるようになるれば、もしもの時に、それを助けとして利用することができる。(36)

教会の片隅で疑念を抱いている人たちを、教会の中心に招き入れなければならない。それによって教会は活性化する。(83)

神との交わりは、もっと率直であるほうがよく、気楽に神に話しかけたり書いたりすることよい……。痛みをこらえ、気落ちしている人を中途半端なことで慰めたりすることはやめなければならない……。こころを死体置き場のようにしてはならない。いいかげんな助言をしてはならない。(85)

イングリット・ウエーバー・ガストが、つつ状態にいる人たちにとって神は、その同伴者となることはない」と言い、また「だれかが近くでケアをすること」だけがつつ状態にいる人に結びつく唯一の道筋であり、それはその人にとってイエスの弟子との出会いのしるしと

もなる、と言っていることは、決して矛盾してはいない。兄弟姉妹が神を指し示すからこそ暗闇の中でも神が傍らに居るといふことを、彼女は説教で語るのである。イングリット・ウェーバー・ガストにとつてだれかがそばにいるといふことは、神との出会いのしるしである。なぜなら、その人はイエスの弟子を体現しているからである。

「病気になる、信仰を病気のパートナーにしよつとするものです。けれども、うつ状態の人には、始めからこのパートナーが奪われているのです……」。

神でさえ同伴者にはできないので、一瞬でも一人にしてはなりません。近くにおいてあげることで、それだけが、その人がすがりえるものなのです。しかし、そばにいるといふことは大変難しいことです。(80・87)

「生きる力を失つた人のそばに居場所をさがし、時として、そこから逃げ出したいと思うことはあつても、粘り強くその苦しみを共に分かち合おうとする人、こういう人たちこそ本当にイエスに従つて生きているのだとわたしは思うのです……」。

闇の中で生きるべく定められている人も、そこで主に出会うことができます。もしもその兄弟が主を示すならば。(80・81)

「あなたはわたしの不安から逃げなかつたので」といふ書名にあるあなたがだれのことなのかといふ問題をもつ一度とりあげようと思つた。キリスト教信仰は、危機対処の学習プロセス

スの中で攻撃状態⁽³⁾をカタルシスとして支持し、受容状態⁽⁶⁾へと導くことができるというわたしたちの命題をここに適用すれば、次の三つの解釈が可能となる。

人生のパートナーであるあなたは、わたしの不安から逃げなかった。あなたはわたしのそばにいて、わたしを受け入れてくれた。

教会よ、あなたは、わたしのうつから逃げなかった。わたしのために祈り、わたしにイエスを示してくれた。

神よ、あなたは、わたしの叫びから逃げなかった。あなたとの闘いをゆるし、決してわたしを見捨てることはなかった。

「イエスに従おうとする者は、そのために自分の人生の重荷をどのように担わなければならないかということを知らなければなりません。そこから弟子の道が始まるのです……」

つまり、わたしたちはたとえばこう祈ればよいのです。主よ、日々新たに負う十字架こそが、わたしの一番大事な祈りなのです。アーメン^(100・101)

3 ジャック・リュセラ

「とり戻した光」「人生は今日始まる」 失明と政治的迫害による被害

資料

ジャック・リュセラン³⁶は七歳の時、学校の教室で事故にあい、その後、完全に失明した。彼の感覚器官障害は後天的なものである。

ジャックの両親は、パリのいわゆる「ブルジョワ階級」に属する物理学者であり、目の見えない子のために普通学校に通えるように努力をした。このことは彼がブーヘンヴァルト強制収容所を生き延びた後に、大学教授となり、一家の長、また著述家として、アメリカとパリで活動するための礎石となった。

ジャック・リュセランの自伝は、信仰の記録である。信仰というものが、この人生を、この有限な人生を肯定することであり、そのために努力し、約束された将来のためにこの有限性を可能性ととらえることを肯定することならば、ジャック・リュセランはこのような人生の無限の肯定を体現し、わたしたちの危機対処の学習プロセスにおける目標段階のらせん局面の受容状態^⑥、「やっと分かった・・・」に達したケースとしてあげることができる。彼の二つの自伝の書名も失明した人生への無条件な肯定をあらわしている。

「とり戻した光」 最初の自伝(A1)

「人生は今日始まる」 第2の自伝(A2)

最初の自伝の「エピソード」には次のように書かれている。

「ここでわたしの話は終る・・・」。

著者が一番望むことは、小さなことかも知れないが、この数年、神の恵みにより、いのちに光と喜びを与えていたものが何であるかを示すことであった。喜びは、外からくるのではない。それはわたしたちになが起ころうともいつもわたしたちの内から生まれる。光は外からくるのではなく、たとえ目が

見えなくても、光はわたしたちの内にある。」(A 1・219)

第二の自伝で彼は最後に次のように表明している。

「内的生活とは、『見る』ということは『観察する』ことの一とつであり、『知る』ということとは『理解する』ことの一とつであり、『所有する』ということとは『自分をさしだす』ことの一とつであることを確信することである。この人生の全体は、わたしたちがそのように生きる前から与えられている。けれどもこの贈り物に気がつくまでには、生涯を費やすほどのものである。この人生の全体は、どの瞬間にもわたしたちに与えられている。

人生は今日始まる・・・。(A 1・132)

リュセランの伝記を分析すると、現実受容の意味するところが具体的に示される。学習による危機対処の思考モデルと一致する五つの分析結果を以下にあげる。

1 彼のおかれた精神的、社会的状態はとても良好であるために、知覚障害が障害とはなっていない。彼は目が見えないということを経験することを社会的統合のために与えられたチャンスによって克服している。

2 障害の受容状態⁶⁾はいくつかの前提があって実現しており、それは次のような受容の経験にもとづいている。

子どものジャックにとっては、彼の自己受容を育んだ両親の他者受容。

リュセランの両親にとつては目が見えない子をもつ親としての自己受容を含めた神による受容。

成人したリュセランにとつては、彼の自己受容に対して一度も疑念を抱かせることがないほどに神に受け入れられていることから生まれる他者受容。

3 キリスト者であるリュセランにとつて受容(6)は、沈黙の忍従、すなわち「ナイーブでアパティーンな解決」として運命に跪くことではない。彼にとつての受容(6)とは、目が見えないということに対する対応からも分かるように、それは積極的で主体的な行動である。彼は次のように言われている。

「見えなくなつてはいない人」=「とり戻した光」。

ブーヘンヴァルト強制収容所における死から解放された後、

「死んでいない人」=「人生は今日始まる」

4 現実を受け入れない拒絶状態が、リュセランを見えなくした。彼は暗闇の中で関係を喪失し、自己を見失い、うつ状態に陥る。そのような不安や怒りに満ちた「茫然自失」の状況で苦しんだ。そして、人とのつながりを全く失い何も信頼することができなくなつてしまった。これは、危機対処の学習プロセスの通過段階への逆戻りである。

「視力の喪失では起こらないことを、不安が引き起こす。それがわたしを見えなくしている。」

5 リュセランの信仰は攻撃状態⁽³⁾を支持し、現実受容⁽⁶⁾を導く。

以上の現実受容についての考察は、さらに詳しく分析されなければならない。両親の家の状況は、障害を負う前も後も、非常に良好であったとジャックは記している。

「子どもだった頃を思つと、今も暖かいものがわたしを上から、背後から、また回りから包んでいるように感じる。このすばらしい感覚は、自分の責任で生きなければならぬというものではなく、世話をしてくれる人たちに身もころも、すべてをゆだねている感じだった……」

両親は、わたしを大事にしてくれた。それがわたしが子ども時代に一度も現実に触れなかったことの原因である。

わたしは危険と恐怖のあいだを通りぬけてきたが、それはちょうど光が鏡に反射しているようなものであった。それがわたしの子ども時代の幸せであった。この魔法のよらい、それは一度身につけると一生ずっとわたしを守ってくれていた。(A17)

神と信仰は、彼にとって単なるひとつのテーマという以上のものであり、彼の人生の全体を構成するものである。彼は神を信頼し、神は彼にとって自明なものであった(それは、神は自分自身を証明するということである)。神は彼が無条件の肯定を生きる現実の本質となっていた。

「わたしの両親 それは天国だった。このことをわたしはそうはつきりと考えていたわけでもなく、また両親もわたしにそんなことを語ったりはしなかったが、それははつきりしていた。彼らのうちには何らかの別の存在があり、この存在がわたしを受け入れてわたしに話しかけているということ、わたし

は（小さい頃から気づいていた）この他者のことを神と呼んだわけではない。神についてわたしの両親が話してくれたのは、わたしが大きくなってからのことだった。わたしはその存在に名前をつけたこともない。それがそこにいることが大きなことであった。

そう。わたしの両親の背後にだれかがいて、わたしのパパとママは、わたしにこの贈り物を直接に渡すようにゆだねられていただけなのである。わたしの信仰はこのようにして始まったが、それは、わたしが一度も形而上的な疑念を抱かなかつた理由を説明しているように思われる。このような言明は尋常なものではないかもしれないが、それによって非常に多くのことが説明されるので、わたしはこのことを大きなことと考えている。」

著者は、彼の信仰を「信頼から信頼へのリレー競走」というイメージで見事に描いている。

「この信仰はわたしの向こう見ずなところから来ていた。わたしはいつも走っていた。子ども時代はいつも走っていた。何かを得ようとして走っていたのではない（それは大人の考え方で、子どもはそうではない）。すでにはつきりしていることやまだはつきりしていないすべてに向かつて走っていたのである。わたしはリレー競走のように、信頼から信頼へと前に向かつて進んだ。」（A・1・8）

リュセランは七歳の時、学校の教室での事故（人間に起因する苦しみ）によって失明するという最初の危機にあった。けれども、両親も彼自身も、この不幸を破局とはとらえなかつた。両親は彼を兄弟と同様に「普通に」させ、心理的、社会的危険から完全に守ってくれた。子どものジャックは、失明した自分を受け入れ、身体上の危機を甘受した。後に彼はキリスト者として、子ども時代のこの時期を「光のあらわれ」という題のもとに描き出している。

「翌朝、手術は成功したもののわたしは失明は決定的なものとなった。八歳にも満たない子どもの時点で、視力が奪われたことを、わたしは毎日、天に向かって感謝している。こう言う言い方は挑戦的に聞こえるかもしれないのでもう少し説明しよう……」

八歳の少年は、精神的にも身体的にも未熟なものである。その身体はどんな状況にもしなやかに適確に対応し、彼はありのままの自分を受け入れ肯定していくことができる。この『肯定』から、偉大な身体上の奇跡も起こりうるのである……

わたしはこの単純な事柄を知っており、またある日を境に目が見えなくなったことを一度も不幸だと思つたことはないのである。」「(A・1・13)

第2の自伝の中でも同様に『見えないことへの愛』が描かれている。

「わたしに与えられた恵みの証しの連鎖のお陰で、わたしが目が見えないということを受容するすが与えられたのだということは、全く疑いの余地はない。」「(A・2・114)

リュセランは苦しみの全面的な肯定をチャレンジすべき課題ととらえることに対して、批判的に考えており、それに対して無条件な肯定による苦しみの受容が彼を変化させる力となつたことを強く表明している。その人間に起因する苦しみは、彼にとつて、宿命にともなう刺(くさ)を失い、「なぜ、わたしが？」という疑念がこころをよぎることなく、彼にむしろ、「とり戻した光」という内的視覚が生まれ、それが彼に新しい認識と人生の新しい次元を開いている。

「わたしのテーマ　そういうものがあるとしたら　それはいのちである。こころのいのち、理性のい

のちである。内面世界とわたし自身の関心に人間的に反応するのちである。」(A 2・69)

リュセランは、自己を見失い不安と怒りに満ちた極限状態については、全く異なった描写をしている。彼はその光を再び失い、今度は見えなくなった自分を受けいれることができずに苦しんでいる。

「光が弱くなったり、ほとんど失われてしまう時期もあった。それはいつもわたしが不安になった時だった。自分を信じることができず、事と正面から取り組まずに、ためらったり、試したりしている時に、壁のことを思い浮かべたり、鍵穴に鍵が差し込まれたままになった半開きの扉のことを思い浮かべたり、あらゆるものが敵意をもってわたしを打ったり、傷つけたりしようとしていると考える時、わたしは自分を痛めつけているのだった……。失明では起こらなかったことを、わたしの不安が引き起こしていた。不安がわたしを見えなくしていたのである。」(A 1・17)

リュセランは、ある目の見えない少年と出会って、時を過ごした時、障害を受容しないで、攻撃状態⁽³⁾、交渉状態⁽⁴⁾、あるいはうつ状態⁽⁵⁾の通過段階にとどまっていることは、どれほどつらいものかといつことを思い知ったのである。

「目の見えない子どもにとって、けがやこぶ、さまざまなすり傷や、打撲より恐ろしい脅威がある。それは自分自身に閉じこもることである。」

わたしは一五歳の時に、目の見えない少年と午後の長い時間を共に過ごしたことがある。その子はわたしと同じ年で、さらに大事なことだが、わたしと似た状況で失明していたことである。思い出すと今も切なくなるが、この少年はわたしにショックを与えた。というのは、彼はわたしがそうだったかもし

れない姿の生きた見本だった。場合によっては、わたしは今のようにならなく、彼以上に不幸になつてたのかも知れない。彼は本当に目が見えなかつた。事故以来、何も見えていなかった。けれども、彼の能力は正常で、わたしのように見ることもできたはずであつた。けれども、まわりの人たちは彼を妨害していた。彼を守るといふ理由から、彼をすべての事から引き離し、孤立させていた。感じたことを語ろうとする努力を嘲つた。彼は悩み、報復しようと思ひ、深刻な孤独に陥つた。彼のからだも力なくひじかけ椅子に深く沈んでいた。驚いたことに、彼は、わたしのことを居て欲しくなと思つていたことを知つた。」(A 1・25)

この近所の少年の場合、苦しみによる最悪の脅威が、身体的、心的、社会的な崩壊と言つ三つの次元であらわれている。兩人共からだの視力を失つたが、リュセランはその人生に對する心的、社会的な脅威に襲われてはならず、身体的苦痛を、信頼から信頼へのリレー競走^{レールレース}において、信仰によつて克服した。それでも苦しみを完全に逃れることは不可能であつたが、まさに障害の受容^{アクセプタンス}についての基本姿勢から、自分の人生への積極性が生じている。人々との交わり、社会との關係を築き、場合によつては、自分が傷つくことになるかもしれないというリスクを甘受していたのである。とはいへ、彼も、人生の重大な転換点で、障害のない人も同様であるが、苦しんでいる。しかしながら、彼は近所の少年とは違い、陰鬱^{いんうつ}になることはなく、苦しみに学ぶことができたのである。彼はその苦しみの経験を驚くほど率直に表現している。目が見えないのだから、失明した者にとつて男女間の「不可思議」といふものは、無縁なものであると彼には思われる。彼は、人はいつでも孤独であるといふこと

を、考えないわけにはいかなかったのである。

「フランソワーズがわたしに興味を持っているなんて、そんなことがありえるだろうか。わたしはこれまでのように、幸せではなかった。わたしは気がかりだった。

本当に不安だった。そう、不安がわたしの苦しみだった……。フランソワーズのことはきっかけにすぎない。彼女は、わたしが目が見えないことを思い起こさせたのだ。わたしは、女の子の髪を、その目や姿を、見ることができない。わたしを不安に陥れさせたのは、わたしがこれらのすばらしい不可思議に永遠にふれることができないということであった……。

そのようなことを当時わたしは友人に打ち明けたことがある。わたしに向けられた行動が、同情からのものであったのではないかと、この危険は取り越し苦労ではない。そのことが分からずにいたわたしは、目が見えない人が出会うこともひどい障害に直面していた。良識をとり戻すまで、一年間、わたしは暗闇の中を歩かなければならなかった。」(A・82・84)

ジャックはそのような疑問についての答えとして、最初の本で現実受容について次のように述べている。

「内なる声は言った。わたしは落とし穴に落ちて、わたしたちの内に入り、すべてのものの根源である本当の世界を忘れていたのであり、それに対して、この世界は、ただ過ぎ去るのではなく、わたしがしっかりと信じてさえいれば、年と共に大きく成長していくものであるということをおぼろげに感じることができないのだ。見えないということから完全に癒されるただ一つの方法は、わたしはここで社会的癒し(社会的癒し)のことを言っているが、それは、けっして見える見えないの違(ちが)いとして扱(あつか)わないということである。この偉大な癒しは、改めて躊躇(ちゅうちゆ)することなく、困難な生活、つまり他者の生活の中になつぱり浸(ひた)されることにある。」(A・28)

第2の自伝の中でのリユセランの答えは、さらにはつきりとしている。彼は、「唯一の欠陥として非受容」をあげており、その答えは キリスト者の信仰のパラドックスについて語るパウロの言葉（「コリント四・八以下」と同様に「苦しみから自由な苦しみ」と結びつけている）。

「欠陥などというものはない。このことを目の見えないわたしは身をもって体験した。神 もしも読者が別の表現を求めるならば、自然あるいは生命がわたしたちから何かを奪い取ることはけつしてない。もし何かを奪っているように思われるならば、それは、形あるものや習慣だけなのであって、わたしたちはそのことを知っていなければならぬ。わたしが思う唯一の欠陥は、目が見えない、耳が聞こえない、まひがある。たとえそれがひどいものであっても、などということなどではなく、見えないこと、聞こえないこと、まひがあることを否定することなのである。断念をすすめるわけではない。あきらめるのではなく、現実を、人間の良識を、つまり愛を、そして現にあるものを受け入れる愛が大事なのである。わたしは目が見えないのに『光を愛す』と言つ。光があるからである。

人生から何も得るものがないと思われる時でも、その一瞬の時でも全体があらわれているのと同じように、光はそこにあるのである。」（A 2 - 113）

ここで、「死にかかっているよつであるが、見よ、生きており」（「コリント六・九・口語訳」というパウロの言葉を補足することもできよう）。

ブーヘンヴァルト強制収容所という極度の苦しみの状況もまた、彼が本当に信仰によってのみ受容していたことを示している。一九歳の高校生で、抵抗運動の指導者、ジャックは連

行され、尋問され、拷問を受けた。彼は強制収容所の中で餓えや寒さ、絶望的と思われる病気を耐えぬき、かつて『フランス防衛団』の仲間にしたように、捕虜のための使命を引き受けた。

「悪には立ち向かわなければならなかった……。収容所の中を支配している精神錯乱の雰囲気の中で少しでも理性を失わないようにしなければならなかった。」(A1・206)

ジャックは、彼の棟にいる人たちのために軍事情勢に関する情報を手に入れるだけでなく、ニュースを集め、それを翻訳し解説した。けれども、彼にとつて最も重要で唯一の必要なことは、困窮に対応することであつた。

「わたしは、収容者たちにとどのようしたら生き残れるのかを教えることができた。わたしには自分の中からあふれ出て満ちてくる豊かな光と喜びがあつた。それ(病気になる)以来、『病気になる』だれもわたしのパンもスープも盗まなくなつた。わたしの仲間たちは、ある人を慰めるために夜中に何度もわたしを起し、時には、別の棟にわたしを連れて行くこともあつた。わたしは『めくらのフランス人』になり、学生であることはほとんど忘れられ、『めくらのフランス人』と呼ばれ、さらには、『死にそこない』とも呼ばれていた。数百人の人がわたしにこころの中を打ち明けた。この人たちはどうしてもわたしと話そうとし、フランス語、ロシア語、ドイツ語、ポーランド語で語り、わたしは彼らが語るすべてを理解しようとして最善を尽くした。そのよつにわたしは生きた。これ以上のことは言えない。」(A

1・200)

リュセランが第2の自伝で初めて「苦難の収容所ブーヘンヴァルトでたどつた学習プロ

セスを取り上げているさまは、まさにドフトエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」を想起させるものである。この過程には彼の友人、金細工師エレミーがかかわっている。彼は第五七棟にあって唯一の不安に駆^かられていない人間であった。そして彼はそのことを説明して次のように言っている。

「見える人にとって、すべてはありふれたことである。ナチスは収容所というぞつとするような顕微鏡を手渡しただけである。」

リュセランとエレミーのこのころの対話は、世界の苦しみに対するドフトエフスキーのアリョーシャの憤怒を想起させる。双方とも、悲嘆が現実受容を学ぶ過程で、不可欠な局面として機能していることが、特徴的である。わたしたちの命題にあてはめると、らせん局面の攻撃状態⁽³⁾は、危機対処の学習プロセスの中でカタルシスの役割をもっている⁽⁴⁾。

「初めの頃、わたしはエレミーのことを分かっているところか、彼に憤怒に近いものを感じていた。ブーヘンヴァルトが^{ありふれた}生活と同じようなものだった？ そんなことはありえないことだった。ここにいるみじめでおびえた人、死の恐怖からの叫び、こうしたすべてが^{ありふれた}ことであるというのであるか。当時、わたしはそのように考えることがどうしてもできなかった。それはもっとひどいかもっと美しいはずであった。エレミーがわたしに見ることを教えてくれるまでそうだった……」

うまく言い表すことはできないが、わたしにとって、それは神の啓示でなく、驚くような真理の発見でもなかった。ただ、ある日、金細工師エレミーが、長いあいだ、わたしに彼の目を貸してくれていたことを感じ、分かるようになった。

エレミーは彼の目で、プーヘンヴァルトがわたしたち一人ひとりの中にあることを教えていたのである。プーヘンヴァルトとはわたしたち一人ひとりの中で暖められ、またわたしたちを暖めているものであり、わたしたちが大事にし、愛しているものだということを、彼は教えていた。また、ここから望みさえすれば、わたしたちは闘うことができるということも教えていた……。

『まったくありふれたことだ』と、エレミーは何度も言った。彼はいつも、対象を持たないために克服できずに不安におびえている人たちを見てきた。こころひそかに自分自身を傷つけることだけを願っている人たちを見てきた。そういうことは、いつでも、どこでも同じであって、ここには、そのための条件がそろいすぎていただけのことである。戦争、ナチズム、政治的、国家的精神錯乱は、苦しみと困窮を完全なものにした名作、すなわち、『強制収容所』をつくり出したのである。』(A 2・24・25)

らせん局面の受容⁶⁾の力は変化する。リュセランはそれを喜びの再発見と言つ。

「五七棟のただ中で、エレミーは喜びを見つけた。

エレミーが、わたしたちにくれたこと、それはすばらしい贈り物だった。それはどのような喜びだったのだろうか。生きているという喜び……。

他の人たちが、少なくとも何人かの人々が生きているということ、夜のとほり中に、わたしの生命の鼓動に呼応するのを感じる喜びだった。それは、まったく思いがけないゆるしであり、地獄からわずかしが離れていないところで与えられた、すべてのことへの新たな可能性と力であり、大きな幸せであった。喜びがあるということが分かる喜びであり、まさにいのちのように、喜びがわたしたちの中にあるということ、喜びにはいかなる条件も不必要であり、それ故に、どのような条件であっても、たとえそれが最悪のものであったとしても、喜びは破壊されることがないということを知る喜びであった。』(A 2・25・26)

エレミーのおかげで、後に大学教授となるリュセランは極めて重要な発見つまり、このことをもたらしたのがその聡明な思考力ではなかったという発見に至るのである。エレミーは学問の世界とは無縁であった。リュセランは次のように言っている。

「わたしは、エレミーが見たことを言った。わたしは彼のことを生きている祈りについでるように語った。こまかなことにこだわる人は、エレミーの信仰はおおきうばだと言っだろう。それが重要なことだろうか？彼のために、わたしたちのためにも、彼によつて、世界はどんな時も救われてきたのだ。慈愛はかぎりなかった。それが無くなる時があるとすれば、それはわたしたちが望まなくなったからであり、わたしたちが喜びを失ってしまったからである・・・」

エレミーは、こころの奥底へと入り込み、そこで超自然的なものを見出していた。あるいは、もしこの言葉が気に障るならば、そのかわりに、本質的なものと言つてもよいだろう。それは周囲の状況とは無関係に、いつでも、どこでも、痛みの中にも、喜びの中にも、存在するものである。彼はいのちの源を発見した。そして、彼の周りを透明で純粹なマントが取り囲んでいた。わたしは「超自然的」という言葉を使ったが、エレミーがわたしにしたことはまさに宗教的なおこないとみなすことができるからである。つまり神がいますということ、また、神に帰っていくことができるということの発見である。以上が、エレミーが彼特有な素朴なやり方で伝えた『よい知らせ』である。(A 2・27・28)

「この『よい知らせ』、それは「喜びの知らせ」であり、ここにジャック・リュセランが証言する福音である。」

4 ルツ・ミュラー＝ガルン 「あなたをわたしの手で支えている」

シルヴィアとアルベルト・ゲレス 「知的障害の子どもと共に生きる」 子どもの知的障害による被害

資料

マルクス・ミュラー「ガルン」³⁷は生後一ヶ月の時、天然痘の予防接種を受けて、知的障害を負った。ほぼ時を同じくして彼の両親の父親が痲疾状態となる。その後、障害をもたない三人の娘を産んだ両親はそれぞれプロテスタントとカトリックに属していたが、一九七一年の第二バチカン公会議のあと、カトリックの結婚式をし、キリスト教家庭生活の基礎を定めた。この時点でマルクスは一五歳になっており、両親の元に暮らしていた。

シルヴィアとアルベルト・ゲレス³⁸は共に開業の精神療法士でありかつ医師であった。長女のレギーナとまん中の息子パトリックは知的障害を負って生まれ、他の二人の子は健康に生まれた。そのため彼らは仕事としての専門職をこなし、両親としても大きな課題を負うこととなった。彼らは、被害者として、専門家またキリスト者として生きた。

二組の夫妻、ミュラー・ガルン夫妻とゲレス夫妻は、キリスト者として、わたしたちの子どもが知恵遅れですって！どうして神はこついうことをされたのですか？」と言つ疑問への答えをさがし求めた。彼らは、解決とは言えないものの答えを見出し、その意味の解釈を通して、それ以前とは異なった人生を学んだ。ミュラー・ガルン夫妻は、ナイーブでアパティ―な解決の中に、シルヴィアとアルベルト・ゲレスは、批判的、共感的な回答の中に、答えを見出した。二組の親は、神学とは無関係に信仰がなじうることを示している。彼らは障害を

負う子と共に生きる人生を肯定することを学んだ。彼らの伝記は、わたしたちの命題の正しさを証明している。彼らのキリスト教信仰は、危機対処の学習プロセスの中で、攻撃状態³⁾をその受容⁶⁾にいたるカタルシスとして支持できるようにし、受け入れていることが読み取れるのである。ルツ・ミュラー、ガルのケースから、ナイーブでアパティーな解決がどのようなものであるかを知ることができる。彼女の強い信仰心は、子どものように受け入れる信頼の基礎となっている。この信頼は、たとえば、息子の後天的な知的障害や貧困、また社会的孤立などのあらゆる困難を、神が特別に負わせた重荷として、納得して受け入れることを可能にしている。

「重い病気の子に初めから積極的な姿勢で関わる事ができたのは、基本的な前提条件をわたしが持っていたからです。どのような運命の打撃にあっても、最後には神の意図が分かるという信仰をいつも持っていました。」(117・118)

彼女は、「子どものようにナイーブな」神を信じる強さをもって重い障害を負うマルクスを無条件に受け入れることができた。彼女自身は自分のことを神の子のように思い、また、自分自身と自分の十字架をいつも神に委ね、こつして神に励まされてきたことを知っている故に、運命に対するやり場のない攻撃をあらわす「なぜわたしが？」と言うような古くからの問いが生じることがなかった。

「このことをわたしの定めとして神から受けとったので、『なぜ、わたしの子なのですか？』という疑

問は一度も起りませんでした。わたしは熱心な『キリスト者』として、その他の点ではいろいろな問題を抱えているのですが、このことはわたしにとって特別な神への信頼のあらわれでした。このようなゆるぎのない信頼を、わたしは子どものような信頼と呼びます。懷疑主義者はそれをナイーブというかも知れません。どちらにしても絶対無条件の信頼は、思いあがりに近いものと言えるかも知れません。〔118〕

生き生きとした受容のための基本的な信頼は、状況を変え、意味を発見するものであり、また家族にも役に立つものとなる。

「マルクスは、わたしたちの家族に特別な意味を深く刻み、それはわたしたちと彼のまわりの人たちを変えました……。」〔49〕

「この子への愛は、見返りを求めないで、無償の愛をもってはじめるので、わたしたちを喜ばしい気持ちにしました。愛は、この子のまわりにいる人たちの中で単純で具体的なものになりました。わたしは、ここで、愛を、同情の気持からではなく、いつでも他人のために働き、他人を思い、その尊敬をみとめ、そして保つ姿勢という意味で使っています。……おそらく、彼らの信服と彼らの徹底的な依存性がわたしたちを打つのです。」〔123〕

彼女の夫は信仰の成長と共に変わったが、それは息子マルクスのことを誇らしげに語るるところに表われている。

「……ゲオルクもはじめからマルクスを受けいれていました……。けれども、『その当時』、彼はわたしのように、神を信じていたものではありません。」〔118〕

……やがて、ゲオルクは次第にマルクスへの愛を誇りにも思うようになり、今は、マルクスのこと

を、三人のかわいい娘たちと同じように誇りにしています。」⁽¹¹⁹⁾

姉妹たちの反応の変化が、その学校生活にあらわれている。ある日、ジビレとアネットが同級生のある女子の見てびつた発言に「こころをとり乱して帰宅した。」

『あなたたちのマルクスは本当にまともな人間じゃない。彼は半分動物だよ』

ジビレは怒っていました。『ママ、どうしてそんなことが言えるの。あの人たちはマルクスのことを何も知らないし……わたしたちがマルクスのことをどう思っているのかも知らないじゃない』。わたしが考えあぐねていると、……七歳のジビレは、わたしを恥じいらせ、かつ喜ばせることを、さも当然のように言ったのです。『まあ、愛するのは、あたりまえのことよ』。⁽¹¹²⁾

彼女自身は重い障害を負う子の母として、また重荷を負うことは重荷から解放することであるというキリスト者が生きるパラドックスの中で変わっていくのである。

「マルクスが病気になった当初から数年間、わたしは健康な子の母親が普通にする以上に絶望し、しばしば涙を流し、またこらえきれなくなつて、大声でわめいたことも少なくありません。

本当はこうです。マルクスがわたしたちを豊かにしていること、また重荷であることもわたしたちは感じています。

わたしたちは「病気」の子を愛していますし、彼が健康であれば、なんでもしてあげたいのです。わたしたち家族全員は、マルクスと一緒に暮らしてどんなに多くのものを受けたかを知っています。けれどもこのような経験をしないですんだほうがよほど嬉しいとも思っています。それは逆説的に思われま

す。しかし、どんな病気も、それは成長するチャンスなのであり、どんなに不幸と思われるところにも、励まし合う人たちの話があります。」^(116・117)

彼女はさまざまな負担について「突然、孤独になる」という一章をもつけ⁽¹⁰¹⁾、まわりの人たちがかわっていく難しさをのべ、それに対しては子どものように神を信頼してこそ、すべてが無条件に認められ、ゆるされ、また「分かち合える」のだと言っている。たとえば、彼女はマルクスが、しよっちゅう、かんだり、つばを吐いたりするような、からだの接触をすること、それはキリスト者のミューラー＝ガルンから見れば、十字架のイエスの苦しみを象徴しているものであるが⁽¹⁰²⁾、に対する彼女の嫌悪感について、周りの人たちが、彼女が哀れな子どもを拘束していて、こころがかたくなであるという非難をなげかけ、またそれと同時に、この愛するべき隣人たちは、発作をおこす子どもを見ていられないほどに、やさしいこころをもっているのだと、主張するのである⁽¹⁰⁴⁾。そして、運命の重荷を背負った女性従業員「ミューラー＝ガルン自身」に対して、すでに長いことうんざりしていた会社が彼女の辞職届けを受け取った際に示した安堵感に対して、ショックを受けたことなどから、彼女は社会の中で孤立していくようになるのである。⁽¹⁰⁵⁾

彼女が激しく泣いて感情を爆発させた時、『天』はシュヴェスター・ゾフィアを送り、このシュベスターは家庭の束縛を断ち切ったが、それも束の間^{つか}のことに過ぎなかった。そして彼女は学校の父兄会や人と電話の機会があることに、人とのつながりを求めるあまりおしゃべりをしすぎるという危険をおかし、さらに「厳しい運命を後光^{ゴロナ}のように振りかざすという苦しみの試練を受けた者に特有の傲慢さ^{しうまん}の中に逃げ込む」というさらに大きな危険をおかして

いることを認めるにいたる。」⁽¹⁰⁶⁾

ルツ・ミュラー「ガルンは、信仰は疑いや争いを排除するものではないと言っている。けれども信仰は神に立ち返らせるものである。神の存在が受容^{うけと}を仲介し、いわれのない苦しみ耐えることを教えるのである。彼女は、マルクスが激しい発作をおこすような時には、こころの深いところまでひどい疑念に脅^{おそ}かされている。

「マルクスは悪いことをする分別さえもっていないのに、なぜそんなに苦しまなければならないのでしょうか？」

「こんな苦しみを認める神は本当に憐れみ深いと言えるでしょうか？このように重^{おも}い知的障害を負う子を、それに伴うあらゆる困難や犠牲と共に無条件に受け入れることと、またぞつとするような苦しみを、見ることは全く別の事柄です。それはわたしの力を超えたものであり、そしてわたしは神との格闘を始めたのです。」⁽⁷⁴⁾

けれども、信心深いカトリックである彼女は自分をマリアと同一視している。「マリアはどのような気持ちで十字架の下で耐えていたのでしょうか？…なんと言う恐ろしい苦しみを受けなければならなかったことでしょう。」「また彼女は、現在の苦しみは、将来わたしたちに現わされるはずの栄光に比べると、取るに足りない（ローマ八・一七・一八）と言うパウロの言葉が分かるようになった。

「絶望の底にありながらも、わたしは永遠の幸福を予感していました。苦しみが深いだけ、その代償として約束された喜びと幸せは大きいはずだからです。」⁽⁷⁴⁾

「このようなナイーブでアパティーな解決がもつ信仰の確かさは、詩篇七三篇の一節にも見られるものである。この一節はマルクスの堅信礼けんしんれいの時に読まれた祝福の言葉ごころばなでもあり、それは後に書いた伝記の表題にもなっている。

「あなたがわたしの右の手を取ってくださいるので、常にわたしは御もとにとどまることができ。」(詩篇七三・二三)

シルヴィアとアルベルト・ゲレス夫妻の経験は全く異なつたものである。彼らは被害の当事者である親として、医師や精神療法士としての仕事上の役割とは全く違つた経験をしている。シルヴィア・ゲレスは障害をもつた子を一生「肉体の刺」として苦しみ、そのことを反映して三人称で記述している。それは被害の体験があまりにも生々しかったからである。次のように書いている。

「『どのような母、どのような父にも、障害を負つた子は、たとえその子が離れた施設や病院で暮らしていたとしても、ずっと』肉体の刺とげ』なのです。彼らのいのちにかかわるような苦しみは、どんなことであつても、たとえ子どもが死んだとしても、決して終わることはありません。この子は、両親の人生から瞬時も消し去ることのできない運命なのです」(8)

シルヴィア・ゲレスは、「理解しがたい運命を克服し、それを受け入れるまでの長い道のりから生まれた」本を、二人の子レギーナとパトリックに献呈している。しかしながら、この本は、両親のための具体的で、理解しやすい手引きとして書かれており、そのことは、障

害をもった「わたしたちの二人の子ども」と共に、ではなく、より客観的な「障害を負う子と共に生きる」というタイトルにもあらわれている。彼女は両親や障害を負う子、兄弟たち夫婦の役割や状況についての専門的な意見を明らかにし、その上で具体的な対応策について、家庭や施設の問題についてのベッ、日々の生活から輝く一筋の光において自分自身の状況を明らかにしている。彼女が、そこで障害を負う子の受容と死の誘惑と結びついた非受容という重要な問題に突き当たるとは不可避のことであった。そして彼女は非受容の問題を、まわりの人たちや特に教会からの支援の欠落の結果ととらえている。

「障害を負う子は、強いストレスを休みなく両親に強います。そして両親、特に問題と直面する母親が逃げ場を見つけないことができません。自分自身や子どもを道連れにした死の誘惑を感じることもあります。それは、一生続く負担に耐えられないと感じるからです。そして、また人の助けがなかったからでもあります。両親の無意識の期待は、人から・・・教会から、また神から・・・助けてもらうことです。」⁷⁹⁾

「このような 現実には多くのばあいは期待はずれに終わる 教会の支援が、実際にどのようなものでありうるのかということ、シルヴィア・ゲレスは第九章の「障害を負う子とキリスト教会」で次のように記している¹²⁹⁾以下。彼女は考えられる支援行為の一覧表を作っている。そこでは経済的な援助でなく、偏見の取り除きや思いやるところが中心になっている。たとえば、日曜礼拝に出席した時に、いつも人々の中を好奇の目にさらされて歩かなくても

いいよつな、また恥かしい目にあわないですむよつな、配慮とふさわしい対応をこのよつな支援の一つの例としてあげている。彼女は、「とりなしの祈りにおいて、その重い苦しみを再発見する」ことを強調している。そしてこのとりなしの祈りにおいて、教会は障害を持つ子の両親が受けるいわれのない苦しみと一つになり、そして個人的な苦しみを偶然や不幸として無関係なものにはしない。とりなしの祈りは、信者や教会にとって、特に「何らの特別な業績や理由もなく健康な子どもを持つ両親にとって重要な意味をもつものとなる」。最後に、彼女は思いやりのある連帯を教会に求めている。そのような連帯こそが「肉体の刺」の痛みを取り除くことができるのであり、そしてその具体的な形というのは「訪問支援や話相手をする」という支援、また日曜礼拝 など、教会員の数ほど多様にある。

被害の当事者である父親アルベルト・ゲレスはキリスト者の医師また精神療法士として、後書きの中で重要な問題、わたしたちのパートナー 障害をもった人間？」を取り上げている。^(185以下)彼はナイーブでアパティーな解決に満足できずに、批判的 共感的な答えの中で、このような苦しみの意味と取り組んでいる。精神的な障害のもたらす苦しみは 多くの場合、肉親の死よりも悲惨な 想像を絶するようなカラストロフとして多くの両親を苦しみのうちに死の誘惑へ追いやり、そして障害を持った子どもに対する死への誘惑に追いやるものである。アルベルト・ゲレスはキリスト者として、また二人の知的障害を負う子どもの父として、次のように告白している。

「だれでも自分を正直に反省するならば、わたしたちの、障害を負った人との関係の、最も基本的な要素は、拒絶であり、不安であり、それどころか憎しみであるということを確認ざるを得ないでしょう……。それは自然なことです……。」

向こうへ行け、あっちへ行け、わたしはこれ以上苦しみたくない。どこか遠くへ行け。そうすればわたしは楽になるからと、感じたり考えたりする誘惑からキリスト者も逃れることはできません。」⁽¹³⁷⁾

このように悲嘆を公にするという冒険はゲレスには助けになっっている。彼の大胆な勇氣は、第一に、開業の精神療法士、また医師として、彼は自分自身の障害を負つ子に対して、「拒絶……不安……憎しみといった気持」をもっていることを率直に告白し、また第二に、責任あるキリスト者として、正直に死んでもらいたいという誘惑があることをも認めているところにある。「行け……行つてしまえ」。これは攻撃状態（らせん局面⁽³⁾）へと向かわせる。その表われ方は極めて多様にあり、危機対処の学習プロセスの中で、カタルシスとして受容状態⁽⁶⁾と連帯状態⁽⁸⁾にいたる重要な一歩であることが、わたしたちの伝記分析の結果から分かっている。ゲレスは、いわれのない苦しみに抗議をしたヨブ対して、神がヨブにその意味を明かさなかったことを想起し、彼の批判的、共感的な対応の中で、彼の診療所に来る被害者の親たちの傍らに立ち、多くの無名の人たちの傍らに立ち、嘆きの声をもらしながら共に苦しんでいる。彼はそれによって彼らをおさえ込まれた状態から不本意な人生の遮断⁽¹⁾から、危機対処の学習の中断から解放しているのである。

けれども、キリスト者アルベルト・ゲレスにとつては、彼自身が悲嘆、攻撃状態⁽³⁾を、

周囲に対して手当たり次第に向け、人生のサイクルを固定しないで、彼自身が内的対話の形で直接に神と向き合ったということが重要である。この批判的対話によって信仰がどんなに深められたか、それは、心理学は人間を知っているか？心理学、人間学、またキリスト教についての疑問「³⁹」という三百頁からなる本の中に書かれており、その中で彼は、対象が生存にとって重要であればあるほど、そのことについての知識は少なくなると主張している。また彼は、「わたしはまだ道を発見していないので、このような熟考が不可欠なのである……。」⁴⁰と告白している。また彼は「神の荷を負い、神を称^{ただ}えるだけでなく、すべての事物の中によいことの中にも悪いことの中にも、神を見出すことがあるのではないか」と言う。耳をなりに響く矛盾の認識上の不協和音を問題にすることは興味深いことではないだろうかと考えている⁴¹。彼は自分が見出したことを、信じる理由「⁴²、病気の意味と無意味」、「信じる勇氣」、そして「神の失望、ティルマン・モーザーの『神中毒』」について「という章で表現している。

二冊の本の中で、彼は障害者と共に生きるといつ立場から信仰の定義を導きだしている。彼にとって「信仰は個人の権利の承認」である⁴³。彼はマルティン・ルターの問題と取り組んでいる。マルティン・ルターは重い知的障害の子は、彼らは神を知り、神を愛することもできず、自由に生きることができない、そもそも人間として生きることが望んでいいのかどうかも疑わしい存在であり、そうであるが故に、水に浸けて殺すのが最もよい醜

い肉の塊かたまり「massa carnis」と言っている^(1973:138)。このことからゲレスは障害を負う人と共に生きることを求めている。同情から生まれた暖かい思いやりではなく、深い思索を要するものである。アルベルト・ゲレスは一九七三年の時点では、どんなに重い障害を負っていても、その人は一人の人であり、それ故に、権利の主体であり、この権利はだれからもおかされるものではないが、この権利を主体的に主張し守ることはできないのだという哲学的理解をのべている⁽¹³⁸⁾。一九七九年には、さらにそれを神学的公理に発展させ、個人の権利の承認は、神の義を認めることに通じるものであると主張している。ゲレスは、その中で、病気の意味と無意味」という根本的には解決できない疑問について、次のように言っている。神もまた、「信頼の前払い」の権利を認めており、このことはわたしたちに「勇気をもつ努力」を求めている⁽¹⁶³⁾。それはまた、「定められた存在」の無条件の受容を求めるものであり、彼の教師ジークムント・フロイトが言うように、「自分を暫定的に神の代理人にしようとする」「人間の欲求を断ち切る必要がのべられている⁽¹⁶⁷⁾。ゲレスはヨブ記との関連でこの思想を発展させている。

「神がこの件に関してわたしたちに求めている信頼する勇氣とは神にとってきわめて重要なことであり、それゆえに神はわたしたちにこの勇氣のことをわかりやすく伝えてはいないのであろう。．．．ヨブは神に反抗する過程で、神の恥ずべきすべてをあからさまに述べ立てた。それに対する神の反論は不十分なもので、悪の問題についての説明になっていない。しかしながら、それは神自身の自己証明になっている。わたしに対する裁定は隠されたままであるが、たとえ、個々の意味はわたしの能力で明

らかにできなくても、神について理性的な信頼の前払いがなされていることを期待することができるのだということをお前の知恵と力は精神と理性に対して証明している。お前はわたしの存在の光の中にだけではなく、わたしの隠れている闇の中でも、それは不在というわけではないのだから、わたしに従わなければならない。』(1979:164)

ここにゲレスは、自分の診療所に来る嘆き悲しむ親にとって役立つと思われる解決を見出している。

「たとえ、彼ら(両親)が、そうとは認めないにしても、精神科医や心理学者は次のような悲嘆を耳にすることは少なくはない。先生、わたしはこんなに手のかかって暴れまわる子を、これ以上愛することはできません。この子はわたしに当たります。わたしを叩き、わたしを罵ります。こんな悪い子を愛することはできません。彼らに対して、あなたはこの子の権利を守り、この子の権利を認めようとすることができますとか質問をすることは、彼らをとて安心させるものである。はい、できます。ここからそうしようとしています。と答える人が多い。もしもあなたがそう願うならば、あなたはあなたの子を最大限に愛しているのです、と伝えると、彼らは慰められ、楽になるのである。』(1973:140)

彼は自分をヨブと重ねて、疑問に答えている。

「しかしわたしは、ヨブがそれで納得したことについて言葉を挟はみたい。神はわたしの苦しみの責任を取ることができるだろう。ただし、神がそれをするかどうかは神の問題であり、わたしがどうこうできるものではないということに十分に承知している。それ(わたしの問題)が解決されるならば、わたしも信頼しやすくなるだろうが、その信頼は空虚なものとなる。まさに、この点においてこそ信頼は重荷と感あじられるからである。神はわたしに信頼を重荷として感あじさせることができるのである。．．．

わたしは彼（神）を、悪のゆえに無いものとする裁判官ではない・・・（わたしは）存在しているのかしていかを決する試練に勝利することに重大な関心をもっている。・・・

信仰の場を離れることは自己喪失を意味する。信仰は真実にいたる道であり、内面にいたる唯一の道である。」（1979. 97-103）

アルベルト・ゲレスは、この批判的 共感的な信仰の態度から、知的障害は、医師が治療する「人生の技術的な故障」ではなく、治すことはできないが苦しみを和らげる、人生に有益で必要なもの」というあらたな見解を獲得している。

「健康で力強くで裕福な人は、貧しく弱く病気で、助けと保護を求めている人を必要とする。というのは、彼は、後者の人たちとの協力関係の中で、またこの協力関係なしには不可能な、彼が絶対に学ばなければならぬ一つのこと、すなわち、彼らの救いに至る道、また人類の救いに至る道は下に降っていく道であるといふことを学ぶからである。」（1973. 144）

一九七九年、彼はこのことを展開している。

「病気の人たちは人間的なものを越えた成熟した無私の愛を学ぶチャンスをもたらしたちに与えてくれる特別な人たちである。これが、わたしたちが彼らを家の外に出ていくようにした理由である。けれども、わたしたちはそのようにして、自分自身を失い・・・わたしたちを発見するという代価を見失ってしまった。」（1979. 169）

ゲレスは、わたしたちの世界をソルジェニーツィンの「がん病棟」のイメージでとらえている。「がん病棟」では、治療不能の病気や障害の苦しみや死により、この世のあらゆる希

望とあらゆる人生の意味が破壊される様子が白日のもとにさらされている。そこで、障害を負う人間は、世界がいつもがん病棟の顔をもっているという事実をわたしたちに突きつけるのである。

「わたしたちがゲッターに追いやるような人々の一人として傷つけられた存在ではない。わたしたちの誰もが知的障害を負う子どもであり、わたしたちを守ってくれる手がわたしたちに道を指し示すことに頼らざるを得ないのである。」(1973:15)

アルベルト・ゲレスは次のように要約している。わたしたち、いわゆる健康な人間はこの世に病気や障害があることによつて、そうだったものがない場合とは異なつた存在になつているのだとアルベルト・ゲレスは纏まとめている。彼はそのようにして「向こうへ行け」と叫びたくなる気持ちを押しとどめ、「そばにいてほしい」と願うチャンスとして理解しているのである。

「わたしのそばにいて下さい。そうすれば、わたしたちは皆、そうなるべき人になることができるよ。」(1973:148)

5 ローレル・リー

「火の中を歩いても焼かれず」がん、離婚、死の宣告による被害

資料

ローレル・リー「40」は最終段階 という悪性リンパ腫のがん患者であり、また三人の子どもの母でもある。彼女は三番目の子を医師の助言に反して懐胎し、放射線治療のあいだその子を持ちこたえ、目前に迫った死のことで、彼女は三人目の子ども誕生、夫からの離婚の申し立て、経済的困窮と、ベストセラー作家として世に出るということと同時に経験した。

伝記分析では、死の宣告による障害はがんの比喩と結びつけられている。今日では四人に一人ががんで原因で死んでいる。それゆえにこのような特有の人生の問題は身体障害、心的障害、感覚器官障害、知的障害とは別に扱われるべきであろう。被害者は慢性的な人生の支障の際にも危機状態に陥るが、この状況は何者によっても改善されることはなく、不可避的に人生を新たに学びなおすことが求められる。ローレル・リーは彼女の日記の中にその答えを求めた。この答えはわたしたちが、批判的 共感的な対応」とよんでいるものである。

ローレル・リーの苦しみの物語は聖書の中に記されていてもおかしくないものである。そして奇跡物語というものは具体的な治癒について語るものではなく、ローレル・リーもそのがんが治るわけではなく、死は間近に迫ってくる。むしろ視点を変えようとする努力について記したものであることが、彼女の物語にも認められる。ローレル・リーは病氣、悲惨、貧困、離別、そして孤独に耐えながらいつも神を身近に感じていた。

「わたしは死の中にすばらしいことを発見しました。それは、外なる人は衰えていくとしても、内なる人は日々新たにされるという、わたしの内なる人生の旅でした。」(本の表紙)

ローレル・リーは生きていることが幸せであった。とはいえ、どんな犠牲を払っても生きようとは思わない。

「わたしは生きているのか死んでいるのか、はっきり分らないところにいました。かすかに垣間見た天国はとても魅惑的でした。子どもを思わなくてよいのであれば、この天国の窓から離れたくないと思っほごでした。」(本の表紙)

これがローレル・リーのキリスト教信仰の基本的態度であり、この態度が、彼女が「不幸なこと」と言っていることに対して適用されている。どの行にも感じられる彼女の「幸せ」や「ゆるぎない健康」には魅かれるものがある。ドイツ旅行をしていた時、彼女のドイツ人編集者は次のように書いている。

「ローレル・リーが不治の病であることは・・・後に知ったことであるが、彼女はゆるぎのない健康の人で、人に助言などは求めなくてもよいほど積極的でした。彼女の生きようとする勇氣には魅かれるものがあり、それは健康と病気の境界をなくしていました。」(4)

彼女自身が言っていることを聞こう。

「医師たちに知ってもらいたいことがあります。それを彼らに話したとしても、忘れられてしまうので紙に書いて残しました。彼らとわたしの家族に贈り物がしたかったです。」(表紙と110)

言葉にならないことを、書き留めるために印象的なイメージが利用されている。脾臓ひぞう手術のあとに、彼女は悪性リンパ腫の終わりから二番目の第三段階であるという説明を受けた。その時、彼女は攻撃を爆発させている。

『宣戦布告』がなされた。(108)

「わたしにはまだ学校に行っていない小さな子どもが三人います。(107)

「わたしになげかけられた、そして信じてきたいるるな励ましの言葉を思つと、おかしくなりそうです。』だれにでも同じ運命が開かれている。それなのに、わたしはともひどいくじを引いてしまいました。それは冬のことでした。わたしのたった一つの上着さえも盗まれてしまいました。(107)

彼女は思い切り泣きたい気分だった。けれども知らない人を彼女の苦しみに巻きこんで縛りつけることは避けたかった。そして彼女は防衛メカニズムを装備して、精神的武装をして問いかけた。「この結果が今後の治療計画にどのような影響をおよぼすのですか?」レントゲン照射療法や肝臓と脾臓の検査が何度もくり返されると混乱してしまい、脾臓はもうとつてしまつてないので、と抗議した。それに対してはただだんに「ああそうですね」と言われただけで、彼女は放つて置かれたのである。

彼女は、当時のことをエレベーターのイメージにたとえて表現している。彼女はエレベーターガールで彼女だけが自分の思つとおり昇降ボタンを押すことができるのである。

「わたしはひとりきりでした。思っていることや感じていることを、どう言ったらよいでしょう？それはエレベーターの中で『昇降』ボタンを押して思い通りにする時のようでした。数千年前に一人の預言者が歌った歌の一節が思い出されました。『いちじくの木に花は咲かず、ぶどうの枝は実をつけず、オリーブは収穫の期待を裏切り、田畑は食物を生ぜず、羊はおりから断たれ、牛舎には牛がいなくなる。しかし、わたしは主によって喜び、わが救いの神のゆえに踊る。』（八バクク書三・一七以下）

「この『詩』は、速くしたり、大きな声で歌うことはできませんが、消してしまうことはできません。送り主である『聖霊』から来ているのですから。死の不安に悩み苦しんできたことは、理解を超えた向こうにある大いなる喜びにすっかり変ってしまいました。喜びと平和は一つです。わたしはこの高みからまわりを見渡そうとしました。」⁽¹⁰⁹⁾

「わたしは医師たちを呼び戻して、彼らを慰めたいと思いました。けれども、その代わりにクララがやってきました。彼女は『嘆くものと共に泣き、喜ぶ者と共に喜ぶ』ことを知っていました。」⁽¹¹⁰⁾

ローレル・リーの信仰はあらゆる理性の働きに反して、死の恐れという山をも動かすほどのものであった。彼女は自由を取り戻し、自分の道を進んで行った。ニューヨークタイムズは、ローレル・リーは、がまん強く快活で、人生哲学とイエスへの信仰をもって問題に取り組み、死に立ち向かった」と論評した。

彼女は入院した時、他の惑星に到着した時に感じるカルチャーショックのようなものを覚えた。たとえば、胎児の成長を確認するために予定されていた超音波測定装置が壊れていたので、先に放射線治療を受けなければならなくなった時、彼女は不安でパニック状態になる

が、その時、聖書のナアマンの物語を思いながら、将来への期待と落ち着きを取り戻した様子を記している。

「死ぬほど驚きました。まるで家畜運搬用車両に押し込められて、アウシュヴィッツかどこかの絶滅収容所に連れていかれるかのようでした。

病棟の通路に来た時、不安は果てしなく広がりました。大小の計器のことはなにも分かりません。患者は『危険注意』『放射線領域』と書かれたドアの向こう側で治療を受けました。

赤いランプは、技術助手がスイッチをまわし、がん患者をモニターで観察しているあいだ点灯していました。⁽³³⁾

検査室の中に運ばれ、そこで、熱心に祈っていると、聖書物語の「こまが浮かんできました。

『シリア人ナアマンは重い皮膚病を患っていた。彼は預言者を訪ね、助けを求めた。するとヨルダン川に行つて七度水に浸かりなさい。そうすれば清められると言われた。ナアマンはこの助言を聞いて、彼に従い、病気は治つた。』

この物語は更に続くのですが、この瞬間、わたしには進むべき道があり、言われたとおりに照射治療を受ければ、治るのではないかと思われました。⁽³⁴⁾

彼女はサイエンス・フィクション小説の拷問の場面を思わせるような処置をがまんして待つていた。その後、超音波診断の結果が出るまで、放射線治療を延期するという通知があった。彼女は歓声をあげ、「車いすでの輸送をことわり、わたしの道を喜んで』歩いて帰つたのである。』⁽³⁵⁾ところが、そのあと「ただちに放射線治療をおこなう必要があります。」とい

う診断がなされるのであった。

「わたしは胎児に危険だということを知っていました。．．．わたしは涙があふれてきました。」(49)

主治医は出産を目前した彼女の治療の可能性を疑い、その決定を彼女の判断に任せた。

「わたしの神経は引き裂かれるように張りつめていました。人はみなうそつきだ。少しでも力が残っていれば、一本の木のようなしつかりした頼れるものを求めて、午後にも立ち去りたいと思いました。」(50)

けれども再び運ばれて、すぐに照射治療が始められた。再び抵抗状態になったが、彼女は神が共にいて支えていることを知った。

「わたしは器械の中に押し込まれました。器械は大きな騒音を出すので、防護用耳覆いが与えられ、首には小さな米袋が置かれ、腹部には鉛のエプロンが掛けられました。胎内で子どもが動くのが感じられると、わたしはすっと神を思いめぐらしました。

一回目の治療の日、引き潮のあとにまた潮が満ちてくるように、こころに平和がゆっくりと満ちてきて、徐々に満ちてくるその潮の様子を水彩絵具で描いて過ごした。またイザヤの言葉を思いながら、わたしは小さな絵を描きました。

『火の中を歩いても、

焼かれず、

炎はあなたに燃えつかない。』(51)

「抵抗と信従」の格闘は続いた。彼女はそれを悲惨な警で次のように描いている。

「わたしの部屋には『ライオンたち』がいました。時としてライオンは巨大になり、わたしは震え、またライオンが小さくなることもありましたが、それでもライオンは牙をむき出していました。」⁽¹³⁵⁾

「放射線ががんをひどくするのではないかという不安もありましたが、その不安は別としても、頭の毛が抜けて膝頭のようになってしまうのはいやでした。病気とその治療は屈辱の連鎖となり、それらはまさに謙虚になるように肝に銘じさせるものでした。わたしの部屋はまるでアイススケートリンクのようになりました。いすに座って書いているあいだ、わたしは滑ったり障害物をさけて飛んだりして上機嫌でいることができました。けれどもスケートリンクにはそこかしこに穴があり、避けなければならなりません。足は濡れて冷たくなり、わたしはベッドに横になり、悪寒が繰り返して襲ってきました。」

(136)

長期の入院はホームシックと死にたいと思つ気持ちを呼び起した。

「その時ほどこころの平静を失っていたことはありませんでした。わたしはこれ以上生きようとは思わなかったし、少なくとも病院で生きようとは思いませんでした。」⁽⁵⁹⁾

けれども、彼女は病院にいても、神が近くにいることを感じていた。彼女は医師たちとの出会いの中で、それを経験していた。医師の一人であるマイケル・マイナーにとって、彼女は、まず第一に、人間であり、ある一つの「症例」ではなかった。

「このことは、ことばの上でよりも、むしろ心情的なところに色濃く表われていました。わたしたちの会話が医学的なこと以上に及ぶことはまれでした。マイナー先生は自分の内面をほんのわずかだけし

かあらわにすることはありませんでした。」(61)

「けれども、次のようなこともありました。健康な彼は、ローレル・リーのゆるがぬ精神的な健康に影響を受け、次のように言いました。『わたしは今日以上にもっと幸せだった時代があります。その頃にもう一度戻りたいのです。』」(63)

彼はローレル・リーに尋ねる。

「どのようにキリスト者になったのですか？」(62)

メリー・エリザベスの誕生は、彼女にとって聖書の約束のような喜びをもたらした。

「嬉しさのあまり地の果てまで走り出したいような気持ちでした。」(68)

「メリー・エリザベスは、土曜と日曜日の短い時間、わたしと、わたしだけと一緒にでした。魔法の輪がわたしたちをとり囲み、将来へのどんな不安もなくなりました。」(69)

そして小児科医レヴィ・ストウが、メリー・エリザベスの診察の結果を伝えた時、彼女はダニエル書を思い浮かべた。

「ダニエル書には、汚れた食べ物を拒否した四人の少年のことを『他のどの少年より元気である』・・・と書かれています。それと同じ言葉を彼は無意識に使っていました。』」

その時レヴィ・ストウ医師はさらに彼女に尋ねた。

「あなたはどこかの教会に属していますか、または何かに属していますか？」(74)

批判的 共感的な対応をする彼女の探求、またはボンヘッファーのいゝ抵抗と信従」の間の道への探求は続いているが、ただ、病院と家庭を行き来しているために一時的に中断しているのである。

「精神的にまいってしまいました。人生は退屈で、灰色になり、過去も未来もなくなりました。日々の重荷がわたしを地に押しつけました。」⁽⁸⁴⁾

彼女ががんを病んでいない人たちの間にあって、まるでらしい病患者「重い皮膚病」であるかのように感じ、すべての被害者の嘲りの眼差しに苦しんだ。

「彼らの肌に記載された赤いしるしを見ましたか？ 照射治療のためのものです。それはまるでらしい患者の一群が通る時、まわりの人間が『けがれ、けがれ』とささやくのに似ています。」⁽⁸⁶⁾

特につらいのは、がんの子どもの母親たちに会うことであり、彼女は彼女たちの苦しみを自身の苦しみに重ね、そのつらさを大声で叫んでいる。

「わたしの子どもたちがそれとは反対に健康そのものを体現していることを世界中にいつも謝り続けていなければならぬといつような気持ちでした。わたしの子が元気でごめんなさい、ごめんなさいといわなければならぬような気持ちでした。彼女らの子どもたちは、彼女らのもとを去って行き、わたしはわたしの子どもから去って行かなければならぬのです。アメリカにはくだけた別れの挨拶があります。あるロックの歌から生まれたもので、それは『さよなら、アリゲーター……！』というものです。わたしはこの言葉を思い浮かべずにはいられません。」

『さよならを言うのに、どんな言葉があるでしょう？わたしはもうすぐここを去ります。死が呼んでいるのです。一番いいのは、『さよなら、アリゲーター！』と大声で叫ぶことです。』(87)

うつ状態⁵⁾の局面で、これらの子どもたちの失われた未来と彼女自身の未来に対しての「予見的悲嘆」と並んで、病気によってすでに失われたものについての「受容された悲嘆」を体験し、さらに彼女の夫から突きつけられた離婚という事態に苦しんでいる。

「家に帰ると、夫がわたしの持ち物の一部を取り出して箱に詰めているところでした。『何を考えているのですか、死んだ妻のものを厄介払いしようとしているのですか？』といらだって言いました。

『そう、そんなところだよ』と彼は答えました。』(117)

それは三月一三日のことだった。そしてその二ヶ月後の五月二七日に彼女は次のように書いている。

「家とは自分が受け入れてもらえるだろうかと心配しなくてよい唯一の場所です。・・・わたしが家に帰った時に、住所は変わっていないけれども、そこはわたしの家ではなくなっていました。』(141)

彼女は悟った。

「彼にとつてわたしはすでに死んでいるのです。」

「わたしたちは違った二つの世界を生きています。』(145)

彼女の夫はこのことを次のようなイメージで表している。

「君はいつも一緒にいる二匹の犬を見たことがあるだろう。そしてその一匹が突然、車に轢かれたのを。残された一匹は事故現場を走り回り、どうしたらいいのかわからないまま、吠え立てているんだ。」

(130)

彼女は「五月三日、月曜日」の日記に「アメリカ国民哀悼の日」と記した。そして続けて、捨てられたことに対する終止符が置かれている。

「友人たちはわたしを受け入れてくれました。リチャードは離婚届を出しました……。」

わたしはまるで森の奥深くで暮らしているようでした。森の中に迷い込んだヘンゼルがいけないグレーテルのようでした。声を聞くと、魔女はわたしを食べようと思いました。わたしがよくよく考えにふけているところで、本来の闘いが始まりました。『泣きながら夜を過ごす人にも、喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。』(詩篇三・六)ということばに悩みをゆだねました。」(148)

あらゆる理性的な判断に逆らって、彼女は家を借り、子どもを引き取り、そして日記を最後まで書き上げた。この日記は彼女の担当医のマイケル・マイナー医師に渡し、彼のもとから多くの医師の手に渡り、読まれることとなった。ついにはアメリカの保険大臣の個人的な諮問委員の目にまで触れることになった。ローレル・リーの伝えたことはナイーブでアパティーな解決という意味で、神の試練や罰としての苦難を称賛するのではない。日曜新聞で彼女の編集者とのインタヴューがおこなわれた。彼女は次のように言っている。

「どうしてこの災いを受けなければならないのかわかりません。またこの苦しみの中に肯定できるものを、わたしは何も見出していません。」(142)

ローレル・リーは彼女の証をのべている。彼女は、神、彼女の創造者とこころの中で格闘し、叫び声をあげ、悲しみ泣いた。けれども神、彼女の救い主は「わたしは、あなたと共にいる。火の中を歩いても焼かれない」という約束を果たした。ローレル・リーは、批判的で共感的対応の中でがんを受け入れた。

「死の中には、外なる人は滅びても、内なる人は日々新たにされる、というすばらしいものがあることを、わたしの医師に知ってもらいたいのです。それは、内的生活をめぐるこころの旅でした。」

女性のヨブ、ローレル・リーは地獄を通ったが、常識や医学的予測に反して、山を移すほどの言葉にはあらわせない、燃えるような信仰によってそこから引き出されたのである。ローレル・リーはこのように生きており、その彼女の日記のなかに証人として生き続けている。